

「幻の文豪」アルフォンス・ドーデの移入：「最後の授業」に注目して

山根, 祥子
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/27323>

出版情報：Comparatio. 16, pp.59-73, 2012-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン：
権利関係：



「幻の文豪」アルフォンス・ドーデの移入 ―「最後の授業」に注目して―

山根祥子

はじめに

19 世紀フランスの作家、アルフォンス・ドーデ Alphonse Daudet (1840－1897)の翻訳作品が初めて日本に紹介されたのは 1889(明治 22)年 2 月の讀賣新聞に掲載された「緑葉歎」(*Kadour et Katel*)であった。明治の作家たちにも広く親しまれたドーデが「幻の文豪」と言われるようになった所以は、明治 20 年代においてドーデの翻訳作品よりも先にドーデに関する人物評や作品評価の記事が出回っていたからである。しかも、ドーデに関する論文や記事に見られる「文豪」としてドーデの評価は英字新聞・雑誌、またフランスでの評価をそのまま伝えていたと思われ、彼は作品よりも名前が先に独り歩きしていた「幻の文豪」であったと富田仁は指摘する¹。その後「最後の授業」の翻訳、教科書掲載などによりドーデから「幻の」という枕詞は取れたように思えたが、1980 年代後半以降ドーデの作品は新たに翻訳されることはめったになく、再び「幻の文豪」となってしまった。

本稿ではドーデを「幻の文豪」とした要因を戦前から戦後の教科書に掲載されていた「最後の授業」(*La dernière classe*)の日本における受容を踏まえながら作品の翻訳比較を中心に考察していきたい。

1. 日本における「最後の授業」の受容

「最後の授業」*La dernière classe*はドーデが 32 歳であった 1872 年に *L'Événement* 紙上に発表したものであり、フランスの新聞に毎週月曜日に掲載されていたそれらドーデの小話をまとめたものが 1873 年 3 月に *Contes du lundi* として刊行された。日本における *La dernière classe* の翻訳は 1902(明治 35)年 3 月に英訳からの重訳でほぼ逐語訳に近い形で『新小説』に発表された紅葉山人(尾崎紅葉)、甞夢生共訳の「をさな心」を初めとし、1904(明治 37)年 5 月 8 日付『讀賣新聞』の文芸欄に掲載された、天絃(片上伸)訳の「最終のお稽古(おしまひのおけいこ)」、そして現在最も入手しやすい 1936(昭和 11)年に岩波文庫から出版された桜田佐訳の『月曜物語』に収録されているものまで、およそ 30 人もの翻訳家達によって数多く行われている²。

2. 「最後の授業」の翻訳比較

アルフォンス・ドーデの「最後の授業」の翻訳を読み比べると大きく 2 種類に分けられる。読み手を子どもとしているもの【E】と、そうでないもの【A】である。【A】に分類される作品は、甞夢生・紅葉山人の「をさな心」、天絃の「最終のお稽古」、桜田佐の「最後の授業」すべて文体の違いはあるものの逐語訳となっている。

【A】	文体	省略	添加	変更	解説の付加
-----	----	----	----	----	-------

抵夢生・ 紅葉山人 版 ³	敬体 現代語的逐 語訳			「つぐみ」→「鷗」、「先生の 大きな定規」→「鞭」、「鉄の 定規」→「鐵の鞭」、「オゼー ル老人」→「老牧師」	「ウブロン」につ いての註
天絃版	常体 逐語訳		挿 絵 付		冒頭に普仏戦争 に関する解説
桜田佐版	常体 逐語訳				

そのため原文との大きな違いは生じてはいないが、小説の背景となる普仏戦争に関する解説があるものや、フランス語の植物をそのまま片仮名で記すだけでなく註を付けることで理解を深めるとともに、異国情緒をも感じられる翻訳となっている。

しかし「最後の授業」の翻訳リストを見ていくと、およそ7割が子ども向けに書かれた雑誌、書籍に収録されており、それら子ども向けの「最後の授業」を読み比べて見ると、原文に沿った一人称で物語が展開していくもの【E】と三人称のもの【E'】、さらに(1)教育的配慮がなされているもの、(2)過度の教育的配慮がなされているもの、(3)底本の違いによる別訳、(4)ドーデの原作から離れた翻案といえるものの4つに分類できるといえる。

	文体	省略	添加	変更	解説の付 加
【E-1】 子ども向 け桜田佐 版	敬体	先生にあ てられた 時のフラ ンツの心 情		「ホップ」→「ひいらぎ」	「あとが き」
【E-2】 Aの桜田 佐版 ⁴ を 子ども向 けに改変 した槇本 ナナ子版	・敬体 ・フラ ンツの 心情を 『』で 台詞調 に強調	・お手本 の繰り返 し ・習字の 時間の幼 い子供た ちの様子	・プロシアに戦争で 負けたこと ・くやしい思いをす るフランス	「僕のフランス語の最 後の授業！」→「ああ、 国語の最後の授業！」	「『月曜 物語』を 読むまえ に」 「読書の 手びき」
【E-3】 南本史版	常体	副題「小 さなアル ザシアン		「自分の国の言葉を話 すことも書くこともで きないのか」→「自分の	「「最後 の授業」 を読むま

		の物語」 の表記		国のことばの読み書き さえ、ろくにできないの か！」 ⁵	えに」 「あとが き」 「ずいそ う」 「読書の てびき」
【E-4】 関口潤版	口語体	ミストラルの言葉 の引用	・他の登場人物 ・国旗の掲揚 ・国歌の斉唱 ・ドイツ統治への不満と不安 ・戦後の日本を連想させる場面⁶ ・フランス語の動詞の活用 ・アメル先生との別れを惜しみ泣く子どもたち ・「波にうたれたれど沈まず」というフランスの格言	・授業に遅刻するフランス→一番乗り 「ハト」→「蛙」	
【E'-2】 鈴木三重吉版	敬体 三人称	かじ屋のワシュテルに声をかけられる場面		「先生の大きな定規」→ 「むち」 ・フランス語の授業を惜しんで教室に集まった村人→ドイツ側の村人 ・子どもたちと一緒に発音するオゼール老人→ドイツ側にたっていた村人が子どもたちに交じってフランス語を発音	冒頭に普仏戦争の説明

読み手を子どもに限っていない【A】の「最後の授業」が逐語訳であるのに対して、「最後の授業」の翻訳作品の大半を占めている【E】の子ども向けに翻訳あるいは翻案された作品

にはやはり読み手を意識して書き換えられたものが多い。【E-1】を除いて、全体的に子どもたちが当時のアルザス・フランスの状況を理解し、感情移入をしやすいような表現あるいは修身的要素が感じられる表現が多用されているのが特徴と言える。

例えば、【E-2】槇本ナナ子版に添加・強調されたフランツの心情は以下のように綴られている。(下線部は論者によるもの。)

ぼくは、気が遠くなるほど驚きました。

『なんてひどい、ドイツ人たちめ！ いくら戦争で負けたからってあんまりだ……。

じゃ、あの掲示板に書いてあったのが、このことだったのか……。』

このとき、やっとわかったのです。

ああ、国語の最後の授業！

『それなのに、ぼくは、ようやく字が書けるだけだ！ じゃ、これからはもうフランス語は、教えてもらえないのだな！ だまっていわれるとおりにしなけりゃいけないなんて。』

(中略)

『かわいそうな先生……。』

先生は最後の授業をするのに、いちばんいい服を着てきたのです。ぼくも、いまようやく、村の老人たちがきているわけがわかりました。どうも、めったにしか学校にこなかったのを、すまないと思っているようでした。そして、四十年もの長いあいだ教えてくれた先生に感謝し、戦争のために情けないことになったじぶんたちの国を、悲しんでいたのです。

この槇本ナナ子版はアルザス・ロレーヌ地方の言語文化の背景⁷を考慮せず、アルザス＝フランス、アルザスに住む人々＝フランス人として物語を再話している。アルザス＝フランス＝フランス語というイメージの出来た読み手にとって「フランス語の最後の授業 (Ma dernière leçon de français!)」の部分を「国語の最後の授業！」と変更されていても特に違和感を覚えることはない。戦争に負けたことをフランツの台詞として盛り込むことで、この「最後の授業」を戦争によって母国語が使えなくなってしまうある地方の一少年の物語と単純に解釈してしまうことは言うまでもない。

ドーデはこの「最後の授業」をアルザス・ロレーヌ地方のために書いたのではなく、パリに住むフランス人に向けてかいた物語だということを念頭に置いておかなければならない。湧き上がる愛国心から普仏戦争に従軍したドーデだったが、彼はその後のパリ・コミュンには決して参加しなかった⁸。この地方の言語問題に関しても、ドーデ自身 26 歳の時に徒歩でアルザスからシュヴァルツヴァルトまで旅しており、日常的にこの地方で話されている言語がフランス語ではないことを十分理解していたことは明白である。ドーデはアルザス・ロレーヌの代弁者としてこの物語を書いたのではなく、アルザス・ロレーヌを失ってしまったフラ

ンスの哀愁を「世界中でいちばん美しく、いちばんはっきりした、いちばん力強い」フランス語の授業を失うこととなるアルザスの一少年の哀愁と彼の目を通して描かれたアメル先生の悲壮な姿に投影することで、普仏戦争に負けたことに対するパリのフランス人のノスタルジーを描いたと言える。

また【E'・2】鈴木三重吉版の冒頭部を原文と【A】桜田佐版と比較して見ると、以下のような相違が明らかになる。

【E'・2】鈴木三重吉版

今から五十八年前、フランスがドイツとの戦争にまけて、アルサス、ローレイヌの二州をとられたときのお話。アルサス、ローレイヌは、このまへの世界戦争の結果、またフランスがとりかへしました。

小さなフランツは、その朝は学校へいくのがいやでたまりませんでした。なまけて家にゐた方がよつぽどましだと思いました。そとはあたゝかくてしづかです。森のはづれでは、つぐみが謡つてゐます。材木をひく、古い水車場のうしろの草場には、ドイツの兵隊が演習をしてゐる音がしますですからフランツは、よけいに休みたくなつて來ました。

それに、けふは、いやな文法の時間があります。分詞の規則なんて、長たらしくて、むづかしくて、きまつた規則といふよりも、例外の方が多くて、フランルには何が何だか、ちつともわかりません。だから学校へいくのがなほなほいやでした。

【原文】

Récit d'un petit Alsacien

Ce matin-là, j'étais très en retard pour aller à l'école et j'avais grand-peur d'être grondé, d'autant que M. Hamel nous avait dit qu'il nous interrogerait sur les participes, et je n'en savais pas le premier mot. Un moment l'idée me vint de manquer la classe et de prendre ma course à travers champs.

Le temps était si chaud, si clair!

On entendait les merles siffler à la lisière du bois, et dans le pré Rippert, derrière la scierie, les Prussiens qui faisaient l'exercice. Tout cela me tentait bien plus que la règle des participes; mais j'eus la force de résister, et je courus bien vite vers l'école.

(Daudet, *Œuvres I*, 581)

【A】桜田佐版

アルザスの一少年の物語

その朝は学校へ行くのがたいへんおそくなったし、それにアメル先生が分詞法の質問をされると言われたのに、私は丸っきり覚えていなかったの、しかられるのが恐ろしかった。一時は、学校を休んで、どこでもいいから駆けまわろうかしら、とも考えた。

空はよく晴れて暖かった！

森の端でつぐみが鳴いている。リペールの原っぱでは、木びき工場の後でプロシア兵が調練しているのが聞こえる。どれも分詞法の規則よりは心を引きつける。けれどやっと誘惑に打ち勝って、大急ぎで学校へ走って行った。

鈴木三重吉版には冒頭のアルザス・ロレーヌ地方の解説の付加、原文の一人称から三人称へ変更などの違いがみられる。前文に関しては、読み手が子どもであることから、事前に物語の舞台となるアルザス・ロレーヌ地方の知識を付与する意味で設けられたと思われるが、一人称から三人称への変更はあきらかに作者によって意図的になされたものである。原文のように一人称という「私 (Je)」を通しての「同化」でもって物語を進めるのではなく「小さなフランツ」という三人称で描かれることによって、読み手は常に客観性を持った目撃者の立場に立たされている。加えて本文中に原文にはない「フランツは大のなまけもので、學校へ上がつてゐても、いまだにろくに字をよむこともかくことも出来ないのです。」という一文もあることから、フランツに怠け者の少年がフランス語の勉強が出来なくなってしまう現実を突き付けられて今更ながら後悔しているという反面教師的な役割を持たせ、教材の修身要素をはっきりさせるために三人称での翻訳を行ったと考えられる。

学校の教科書にも戦前・戦後を通して松村武雄訳、桜田佐訳、坪田譲二訳、鈴木三重吉訳、松田譲訳など様々な訳版が使われているが、とりわけ小学校の教科書には読み手が幼い子どもであることを意識して翻訳された【E・2】【E'・2】に分類されるものが採用されている。しかし、1971年の教材文の原典主義により、子ども向けに「再話」「翻案」された「最後の授業」ではなく原文に忠実に翻訳されたものが採用され、過度な教育的配慮が見られる翻訳（翻案）の教科書掲載は無くなった。

おわりに

アルフォンス・ドーデの「最後の授業」が教科書に採用されたその主な理由に「国語愛」の教材として適当であったということが考えられる。学校図書出版による昭和52年度の『小学校国語六年下』の教科書には読書指導として以下のような記述がある。

「最後の授業」のフランツ少年は、一生の間に一度起こるか起こらないかというような大きなできごとに出会ったのですが、このことから、どんなに母国語がたいせつであるかについて気づいたのです。

これを読むと、わたしたちが、日ごろなにげなく話している日本語について、考えさせられます。

フランスにとっての母国語が何語であるかという問題を抜きにしても、この小話が当時の日本語と「国語愛」教育に最適なものであったことは言うまでもない。「最後の授業」でアメル先生が語る以下の台詞はまさにその最たるものである。

それから、アメル先生は、フランス語について、つぎからつぎへと話を始めた。フランス語は世界じゅうでいちばん美しい、いちばんはっきりした、いちばん力強い言語であることや、ある民族がどれいになっても、その国語を保っているかぎりには、そのろう獄のかぎを握っているようなものだから、私たちのあいだでフランス語をよく守って、決して忘れてはならないことを話した。

(ドーデ『月曜物語』 桜田佐訳、15 頁)

「最後の授業」はプロヴァンスとは遠く離れたアルザスを舞台にした話ではあるが、ドーデはここに南仏語文学運動(Le Félibrige)の中心人物であったミストラル⁹の言葉を引用した。

Quand un peuple tombe esclave, tant qu'il tient bien sa langue, c'est comme s'il tenait la clef de sa prison*...(Daudet, *Œuvres I*, 584)

* 《 S'il tient sa langue, — il tient la clef qui de ses chaines le délivre¹. 》

F. MISTRAL

¹ Daudet traduit ici les vers 137-138 du poème de Mistral, *«I troubaire catalan»* (《Aux poètes catalans》), recueilli par la suite dans *Les Îles d'or*.

(Daudet, *Œuvres I*, 1476)

普仏戦争後の一地方という物語の舞台設定と、「ある民族がどれいになっても、その国語を保っているかぎりには、そのろう獄のかぎを握っているようなもの」(ドーデ『月曜物語』 桜田佐訳、15 頁)という一文は戦前戦後、どちらの日本の「国語」教育の信念にも合致したものであった。しかし、1927 年に国語の教科書¹⁰に収録されて以降、およそ 50 年にもわたって子どもたちに読まれてきたドーデの「最後の授業」は 1972 年をもって中学校の教科書から消え、1986 年をもって小学校の教科書からも完全に消えてしまう。教科書はその性質上、その時代の需要を汲み取った教材を選ぶものであるため、1970 年代以降、「国語愛」よりも「環境問題」に教科書教材の的は移行することとなる。そしてドーデは再び「幻の文豪」という過去の作家となってしまふのだ。

【注】

1. 富田仁はドーデが「幻の文豪」となった背景を以下のように記している。

ところで、明治二十年代におけるアルフォンス・ドーデは、日本においては、ひと
言でいえば、幻の文豪であった。

鷗外が二、三の小品を翻訳し、紹介の筆をとったとしても、ドーデの全容はとうて
い伝えられず、わが国の一般の読者にはいたずらに“文豪”としてのドーデの名が喧
伝されるにすぎなかった。ドーデそのひとの生い立ちは苦学力行の士としての魅力に
溢れた人物像をつくりあげて、当時の新聞・雑誌のうちに紹介されたのである。

(富田仁『アルフォンス・ドーデと近代文学』、22 頁)

2. 付属したリストを参照のこと。
3. 本稿ではこの版に関する翻訳時の時制や主語等の誤訳は取り上げないものとする。
4. 底本が子ども向けに書かれた桜田版ではないと判断した理由は以下の翻訳部分からの推
察である。(下線部は論者によるもの。)

- ① 原本 **un vieil abécédaire mangé aux bords**

桜田版 A 「縁のいたんだ古い初等読本」

桜田版 E 「表紙のいたんだ古い読本」

槇本版 「グリーンの表紙の破れた、古い教科書」

- ② 原本 **le houblon, qu'il avait planté lui-même**

桜田版 A 「彼の手植えのウブロン」

桜田版 E 「先生の手植えのひいらぎ」

槇本版 「先生の植えたウブロン」

①に関してはドーデの原本にも「グリーン」を指す単語はなく、桜田の訳した「縁」を縁
と見誤ったためと考えられる。②については桜田が子ども向けの翻訳版で教育的配慮から
「ウブロン」(ホップ)から「ひいらぎ」に変更しているが、槇本版では「ウブロン」のま
まである。

5. 田中克彦の『ことばと国家』でドーデの「最後の授業」取り上げたことが発端で巻き起
こった議論がある。田中の引用した翻訳部分、「ドイツ人たちにこう言われたらどうするん
だ。君たちはフランス人だと言いはっていた。だのに君たちのことばを話すことも書くこ

ともできないではないかと」という部分が原文だと lire(読む)が使われているので「読むことも書くこともできない」が正しいという指摘があったのだ。

調査によって初出は parler(話す)だったことがわかったが、lire(読む)の原書(1980 年版の livre de poche)さらには古くは 19 世紀のロシア語訳も存在することが明らかになった。
(以下の下線部は論者によるもの。)

Maintenant ces gens-là sont en droit de nous dire: Comment! Vous prétendiez être Français, et vous ne savez ni parler ni écrire votre langue !... (Daudet, *Œuvres I*, 583)

したがって、「自分の国のことばの読み書きさえ、ろくにできないのか!」(南本、342 頁)という南本史の訳も本人が「翻訳にあたっては、リーブル・ド・ポッシュとアシェットのビブリオテック・ベルトをつかいました」(南本史訳「最後の授業」『少年少女世界文学全集 7 アルプスの少女 最後の授業』、357 頁)と記しているので完全な誤訳とはいえない。

6. 物語の設定ははっきりと「一八七三年、初夏のある朝」と明記されているが普仏戦争後のアルザスと第二次世界大戦後の日本でよくみられたであろう、GHQ と子どもたちの情景を重ねているかのような描写がある。

ボビイ (小使の行ったのを確かめてから、女の子達に)

おい、お前達、ドイツ兵に、何か貰ったろう。

女の子 ……。

ボビイ 何故だまってんだよ。

フランツ ボビイ、女をいじめんのはよせよ。

ボビイ だって、ドイツ兵から、物、貰ってんだもん。乞食じゃねえかお前達。

女の子 1 ひどいわ、乞食だなんて。

女の子 2 あたし達が呼ばれて立止ったら、無理にくれるんだもの。下さいなんて云ったんじゃないわ。

(関口潤脚本「最後の授業」『世界童話劇 下巻』、65 頁)

7. 当時アルザス・ロレーヌ地方はフランス語がほとんど用いられない地域・かなりの住民がフランス語を用いない地域であったことがわかる。田中克彦はアルザス人の母語を追究した上でドーデの「最後の授業」について次のように指摘する。

アルザスの土着の人のことば、すなわちアルザス・ドジン語はまぎれもないドイツ語の方言である。それをドーデは、「ドイツ人たちにこう言われたらどうするんだ。君たちはフランス人だと言いはっていた。なのに君たちのことばを話すことも書くことも

できないではないかと」というふうにあメル先生に言わせているのである。いったい自分の母語であれば、書くことはともかく、話すことができないなどとはあり得ないはずだ。だからこの一節は、この子たちの母語がフランス語ではないことをあきらかにしている。(田中克彦『ことばと国家』、125-126 頁)

「最後の授業」を教材として使う際、戦前・戦後の「再話」「翻案」された作品を採用していた時には気にも留められていなかったアルザス語の存在が「最後の授業」の《よみ》に混乱を生じさせた。そこでアルザス地方の言語・文化事情を以下のように汲み取った。

もともとドイツ領に属していた、そして人種的にも言語的にもドイツ的なものをより多く残しているアルザス・ロレーヌ地方の人々が、何故、＜フランス人だと言い張ってた＞のか。当時のプロシアは専制帝国であった。宗教もまた国教という形で規制されていた。ところがアルザス地方の人々は同じクリスチャンとはいってもプロシア国教とは違った流派に属していたため、その信仰はプロシア政府によって一方的に禁止され、抑圧されていた。そこでアルザス地方の人々は、自分たちの信仰を守るため、プロシアから離れ独立した。ただし独立とはいっても二大強国の間にはさまっての独立などというものは現実的にはあり得ない。

当時のフランスは、フランス革命の影響もあって、プロシアとは比べものにならない程の自由と正義が行われていた。国家体制そのものも共和制という形をとっていたし、信仰の自由も保障され、フランス国会にはアルザス地方からも代議員が選出され、自分たちの利益を守ることがフランス憲法によって保障されていた。こうしてアルザス地方の人々はフランスを選んだのである。(中略)ヨーロッパの人間にとって国籍とは選ぶものなのである(中略)アルザスの人々は、自分の体にはドイツ人の血が流れているように、思想的にも政治的にも、私たちは、フランス国籍を持つフランス人なのだと言い張っているというわけである。(西郷竹彦監修・文芸教育研究協議会『文芸の授業 小学校6年』、190-191 頁)

アルザス地方のドイツへの割譲を決めたフランクフルト条約では、希望するアルザス人にはフランス国籍を取ることが認められていた。この約束にしたがって、約五万人ものアルザス人がそれを望み、フランス、アルジェリア、北アメリカなどへ移住したという。(府川源一郎『消えた「最後の授業」言葉・国家・教育』、19 頁)

こういったアルザス地方の正しい認識に基づいた《よみ》によって原典主義にのっとって訳された新しい「最後の授業」の教材研究が進められていった。

8. ドーデは二十歳のころナポレオン三世の第二帝政下の立法議会議長モルニー公爵の第三

秘書として勤めており、文学に理解ある公爵の下で創作活動に精を出していた。またナポレオン三世の妃ユジェニーに目をかけてもらっていたこともあり、パリ・コミューンには否定的な立場であった。

9. 「ミストラルは、一八三〇年、ドーデより十年早く生れた、同じ南仏出身の詩人であって、ドーデともつきあいがあった。しかしかれは、ドーデとはちがって、フランス語をたたえ、それで書くよりは、自分の母語、プロヴァンス語をさかんにし、このことばで書く道をえらんだ人であった。」(田中克彦『法廷にたつ言語』、260 頁)
10. 教科書教材として初めて使用された「最後の授業」は、1927 年に中学校教科書『新撰 国文讀本』(松井簡編、三省堂)に収録された「フランス萬歳」(訳者不明)である。

【引用文献】

Daudet, Alphonse. *Œuvres I*, Edition Gallimard, Belgique, 1986.

瓶夢生・紅葉山人共訳「をさな心」『明治翻訳文学全集《翻訳家編》12 尾崎紅葉・小栗風葉集』ナダ出版センター、2002 年。

ドーデ『月曜物語』桜田佐訳、岩波文庫、1982 年。

桜田佐訳「最後の授業」『世界少年少女文学全集 13』東京創元社、1953 年。

桜田佐訳 槇本ナナ子文「最後の授業」『少年少女世界の名作文学第 21 巻 フランス編 3』小学館、1966 年。

南本史訳「最後の授業」『少年少女世界文学全集 7 アルプスの少女 最後の授業』学習研究社、1968 年。

関口潤脚本「最後の授業」『世界童話劇 下巻』誠文堂新光社、1954 年。

鈴木三重吉「最後の課業」『鈴木三重吉童話全集 第五巻』文泉堂書店、1975 年。

西郷竹彦監修・文芸教育研究協議会『文芸の授業 小学校 6 年』明治図書、1983 年。

田中克彦『ことばと国家』岩波新書、1981 年。

田中克彦『法廷にたつ言語』岩波現代文庫、2002 年。

富田仁『アルフォンス・ドーデと近代文学』カルチャー出版社、1977 年。

府川源一郎『消えた「最後の授業」言葉・国家・教育』大修館書店、1992 年。

アルフォンス・ドーデ「最後の授業」の翻訳リスト

以下のリストは府川源一郎『消えた「最後の授業」言葉・国家・教育』65 - 67 頁の資料をもとに、加筆・修正を加えたものである。

	年	題名	訳者	発表誌・書籍名	発行所	備考
1	1902	をさな心	牴夢生 紅葉山人	『新小説』	春陽堂	英語からの重訳
2	1904	最終のお稽古	天絃	讀賣新聞		解説・挿絵付
3	1924	最後の課業	鈴木三重吉	『赤い鳥』	赤い鳥社	敬体・三人称
4	1925	最後の授業	後藤末雄	『小学児童文学読本 第六学年 上巻』	イデア書院	副読本
5	1926	最後の授業	八木さわ子	『仏蘭西文學譯註叢 書第四篇 月曜物語』	白水社	フランス語と日本語の対訳
6	1927	フランス萬歳	不明	『新撰國文讀本 第一巻』	三省堂	中学校教科書
7	1927	最後の授業	松村武雄	『最新女子國文 第四巻』	寶文館	高等女学校教科書
8	1927	童話 最後の授業	藤森淳三	『女性』9月号	プラトン社	常体・挿絵付
9	1929	最後の課業	鈴木三重吉	『世界の童話第五集 十二の星』	春陽堂	『赤い鳥』からの転載
10	1932	最後の授業	松村武雄	『女子新日本讀本 第四巻』	星野書店	高等女学校教科書
11	1933	最後の授業	松村武雄	『最新中等國文 第二巻』	寶文館	中学校教科書
12	1934	最後の授業	不明	『最新女子國文讀本 第一巻』	湯川弘文社	高等女学校教科書
13	1936	最後の授業	桜田佐	『月曜物語』	岩波書店	<i>Contes du lundi</i> からの全訳
14	1937	最後の授業	不明	『新女子國文』	至文堂	高等女学

						校教科書
15	1939	最後の授業	永井順	『川船物語』	富山房	百科文庫
16	1948	最後の授業	萩原弥彦	『ドーデ短編選』	丹頂書房	
17	1949	最後の授業	桜田佐	『ドーデ選集 1』	十字屋書店	
18	1949	最後の授業	桜田佐	『スガンさんの山羊』	羽田書店	敬体
19	1949	最後の授業	田沼利男	『初旅・初うそ』	改造社	
20	1950	最後の授業	永井順	『月曜物語』	白水社	
21	1950	最後の授業	桜田佐	『世界文学全集ドーデ・サンド篇』	河出書房	
22	1951	最後の授業	桜井成夫	『少年少女のための世界文学選 3 アルルの女』	小峰書店	
23	1953	さいごの授業	桜田佐	『世界少年少女文学全集 13』	創元社	敬体・解説・挿絵付
24	1954	最後の授業	関口順	『世界童話劇 下巻』	誠文堂新光社	劇用脚本
25	1956	最後の授業	桜田佐	『少年少女のための世界文学宝玉集上』	宝文館	
26	1959	さいごの授業	石川湧	『少年少女世界文学全集 27 フランス編 3巻』	講談社	常体・解説・挿絵付
27	1960	最後の授業	宮崎嶺雄	『世界の文学 小学5年生』	あかね書房	常体・註付
28	1960	最後の授業	河盛好蔵編	『めぐりあい フランス少年小説集』	牧書店	桜田訳（敬体）に近似
29	1961	最後の授業	滝田文彦	『フランス短編名作集』	学生社	常体
30	1962	最後の授業	桜田佐	『母と子の文学読本・小学上級編』	実業之日本社	
31	1962	最後の授業	桜田佐	『新版中学生全集 23 フランス小説選』	筑摩書房	
32	1963	さいごの授業	萩原弥彦	『少年少女新世界文』	講談社	

				学全集 19』		
33	1963	最後の授業	桜田佐	『文学の本だな 中 学編 I』	国土社	
34	1964	さいごのじゅ ぎょう	堀尾青史	『世界名作童話全集 51 風車小屋だよ り』	ポプラ社	敬体・三人 称
35	1965	最後の授業	羽生操	『名作に学ぶ私たち の生き方 8 フラン スの文学』	小峰書店	
36	1966	最後の授業	槇本ナナ子	『少年少女世界の名 作文学第 21 巻 フ ランス編 3』	小学館	桜田訳（常 体）を底本 にした再 話・挿絵付
37	1966	最後の授業	大江賢次	『少年少女世界の名 作 62 最後の授業』	偕成社	
38	1966	最後の授業	宮崎嶺雄	『よんでおきたい文 学 5 最後の授業』	ポプラ社	常体・挿絵 付
39	1967	さいごの授業	桜井成夫	『世界の名作図書館 13』	講談社	敬体・解 説・挿絵付
40	1967	さいごの授業	桜田佐	『少年少女世界名作 選 17 月曜物語』	偕成社	敬体・解 説・挿絵付
41	1968	最後の授業	槇本ナナ子	『日本標準の小学生 文庫 五年 第一 集』	日本標準テ キスト研究 図書出版部	36 からの 転載・副読 本
42	1968	最後の授業	大久保和郎	『月曜物語』	旺文社	常体・解説
43	1968	最後の授業	南本史	『少年少女世界文学 全集 7 アルプスの 少女・最後の授業』	学習研究社	常体・解 説・挿絵付
44	1969	最後の授業	桜田佐	『文学読本 はぐる ま』	部落問題研 究所	岩波文庫 からの転 載
45	1970	最後の授業	桜田佐	『子どもの文学 6 年生』	ポプラ社	敬体
46	1970	さいごの授業	塚原亮一	『ジャンボ世界の童 話 4年生』	金の星社	
47	1971	最後の授業	宮崎嶺雄	『子どもの文学 新	グロリアイ	27 からの

				しい時代の物語』	ンターナシ ョナルINC	転載・挿絵 付
48	1971	最後の授業	那須辰造	『世界名作短編集 外国名作 14』	文研出版	
49	1975	最後の授業	榊原晃三	『ジュニア版 世界 の文学 27』	集英社	
50	1977	最後の授業	佐藤実枝	『世界短編名作選 フランス編 1』	新日本出版 社	常体・解説
51	1977	最後の授業	辻昶	『世界の名作 16 風車小屋だより』	国土社	常体・解 説・挿絵付
52	1979	最後の授業	谷口巖	『文学教材分析の観 点と実際』	明治図書	教材用試 訳
53	1981	最後の授業	南本史	『最後の授業』	ポプラ社	ポプラ社 文庫
54	1981	さいごの授業	桜田佐	『月曜物語（世界の 名作 31）』	偕成社	40 からの 転載
55	1982	最後の授業	江口清	『岩崎小学生文庫 7 スガンさんの山牝 羊・さいごの授業』	岩崎書店	常体・解説
56	1985	最後の授業	松田穰	『心にのこる六年生 の読みもの』	学校図書	『小学校 国語』から の転載・副 読本